

俺は最強なんか求めて  
ない！

飛縁魔

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公、神無月廻かななづきかいと兔うさぎは殺され、自ら望んで『落第騎士の英雄譚』の世界に転生した。黒鉄一輝とステラ・ヴァーミリオンに対し、彼はどう戦って行くのか。そして彼の魔導騎士人生は一体全体どうなるのか。

# 目次

第5話	37
第4話	31
第3話	24
第2話	12
第1話	6
プロローグ	1



## プロローグ

「あれ？お前今日チャリなの？じゃ、一緒に帰れないな。」

「あ、マジ？お前今日バス？」

「バス。今朝雨降ったし。」

「あ、そっか。俺が出るとき降ってなかったからな。それじゃあ、また明日な。」

「おー、それじゃ。」

ある高校の帰り際。駐輪場で二人の男子が喋っている。焦点を当てるのは、自転車で帰る方の男子だ。

彼の名前は神無月廻かんなづきかいと。どこにでもいるような、強いて言えば成績がクラス上位にいる、男子だ。彼の家は別段裕福というわけでも、極端に貧乏というわけでもない。三人家族で、仲のいい父母と一緒に暮らしている。

話は逸れるが、ヒトというのは往々にして危機回避能力が低い、というのが作者の自論だ。想像してみてもほしい。例えば、目の前に殺されたナニカと、血の付着したナイフを持った狂人がいる。そんな状況で、果たして正常な判断ができるだろうか？どんなにいきっていても、きっとできなくなると思う。

それゆえ、目の前に広がった光景を前に、彼——神無月廻兎は、自分がどうすべきか、決めきれずにいた。…いや、もう遅いのだ。先ほど例に挙げた光景そのものが、彼の目に映っている。より具体的に言うならば、原型がわからなくなった母親と思しき物体が転がり、目の前にはナイフを突きつける謎の人物がいた。

「お、お前…誰だよ…？なんで…なんで母さんが殺されてるんだよ…？」

神無月の声が恐怖に震える。その問いに、謎の人物は答えない。代わりにナイフを突き出す。

神無月の人生は終了した。駐輪場で友人と交わした約束は果たされないままに。

—————

神無月が目を覚まし、見えたのは一面の白だった。

「……どこだ？俺はなんでこんなところに…？」

その時、扉が開くような音がした。どうやらここは一つの部屋のようだが、音の方向を向いても誰か人物がいるだけで、扉が見えたり、外が見えたりすることはなかった。

「あ、起きましたか？良かった。」

その人物は、ホワンとした雰囲気羽の生えた女性だった。

「えーつと…ここは…？どこですか？」

「……ですか？ここはつまるどころ死後の世界です。」



少しすれば治まる。やがて神無月は落ち着きを取り戻し、話の続きを促した。

「もう、大丈夫、です。それで、なんでしたっけ…？ 転生…ですか？ あの、二次創作でよく見る…？」

「はい、その転生です。あなたには少しばかりの特典を付与した上で、好きな世界に行っていたできます。」

「その…特典とか世界とかってというのは、自分で選べるんですか？」

「選べますよ。好きな特典、好きな世界です。」

そういうことなら。と、神無月は前々から決めていたように言う。

「その…別にチートキャラとかにはなりたくないの…落第騎士の英雄譚の世界に、Cランクくらいで、回転能力でお願いできますか？」

「構いませんけど…回転能力っていうのは、どういう感じのですか？」

「あらゆるものを回転させることができる感じで。」

「わかりました。それにしても決めるのが速かったですね。普段から考えてたんですか？」

「…。」

「凶星である。」

「まあ、それはどうでもいいですが。それでは、行ってらっしゃい。あ、私の名前を



言い忘れてましたね。私はサリエルです。死を司る大天使とか言われてますけど  
：別に殺すなんてことしないので安心してくださいね。いつになるかわかりません  
が、次に会える時を楽しみにしていますよ。それでは、別の世界へ、ごあんない。  
」  
次の瞬間、空間にブラックホールのようなものが現れ、神無月は吸い込まれ、意識を  
失った。これから彼がどのような物語を展開して行くのか。それは、転生し記憶を持っ  
たまま赤ん坊になった彼の頑張り次第である。

## 第1話

目が覚めると、視点が低かった。どう見積もっても他の人間が自分より大きく見える。それから、考えている頭と行動している体が別々に作動している——要するに、冷静にもものを見てはいるが、オギヤア、オギヤアという声が聞こえている——ことから、廻兔<sup>かいつと</sup>は、自分が赤ん坊になったのだとわかった。

先程までのサリエルとの会話は覚えている。彼女の言葉を信じるのなら、転生し、『落第騎士の英雄譚』の世界に来到ることができたのだろう。しかし…と、廻兔は思う。

（そうか…よく考えれば転生ということは、赤ん坊から人生をやり直すということなのか…。異世界転生って…簡単なことじゃないんだな…。）

それでも自分が望んだ世界に来到ることができたのだ。廻兔にとって、特に不満はない。

舞台はそれから16年後、廻兔が破軍学園に入学するところから始まる。そのため、彼の成長パートはない。まあご想像にお任せする。

—————

その日、日課のランニングを終え、自らの固有靈装<sup>デバイス</sup>、『陰鉄』<sup>いんてつ</sup>の素振りをしていた一輝

はいつもと違うこと——と言っても些細な事だが——に巻き込まれた。ただ道を聞かれたのだ。

「あの、すみません。破軍学園の先輩……ですか？」

「え？ああ、いる年数で言えば……2年目にはなるかな。」

「申し訳ないのですが、入学式の会場つてどこですか？下見のために来たはいいものの、まだ来たばかりで……場所がわからなくて。」

「ああ、それならあっちの方だよ。この学園は広いからね。最初のうちはよく迷うから、注意して。」

一輝は入学式の会場の方向に指を指す。

「ありがとうございます。同じ学校にいるのでしたら、顔を合わせることもあるかもしれませんね。それではさようなら。」

「ああ、そうだね。会えるといいね。」

これが、神無月廻兎と黒鉄一輝くろがねいつきとの出会いである。もちろん、道に迷ったというのは方便だ。いや、訂正しよう。半分本当、半分嘘だ。この時間にならば外にいるだろうと一輝を探した結果、迷ってしまっただけなのだから。

この後、一輝はちよつとした災難に見舞われるのだが、それはこの話には関係ないことのため割愛する。

「確か……こつちに……あれか！第三訓練場！」

廻兎は落ちこぼれのF黒鉄一輝ランクと主席入学のAステラ・ヴァーミリオンランクが戦うという噂を聞き、もうそ

のイベントが始まるのか！と、胸を高鳴らせて、走って第三訓練場に来たのだ。結果は知っていても、それを実際に見るとまた違った感覚が得られるであろうからだ。

しかし、期待はことごとく打ち砕かれた。廻兎が訓練場に入った時にはすでに、黒鉄一輝は自らの伐刀ノウフルアーツ絶技、一刀修羅いっとうしゆらを使っており、それは戦いが終盤に入ったことを意味していた。

「ハア……ハア……。遅かったか……。まあでも一刀修羅だけは生で見れたし、よしとしようかな。」

廻兎はそう言い残すと、1分もしないうちにそそくさと出て行ってしまった。

入学式当日。廻兎は教室の椅子に座っていた。期待しすぎて早く来てしまったため、周りには誰もいない。

（しまった……早過ぎたら誰もいないのは当たり前だよなあ……。）

と反省している廻兎の前に、不意に影が落ちる。誰か来たのだろうか。自分が言うのもなんだけどこんなに早い時間に？廻兎が上を見ると、そこには一度見た黒鉄一輝の姿

があつた。

「君もこのクラスなんだ。前にもあつたけど、こんにちは。」

「あれ？前に会つた…。先輩じゃないんですか？」

ちなみに今、廻兎は怪しまれないよう、言葉に注意している。別の世界から来たとか言つたら恥ずかしいことこの上ない。廻兎が元の世界にいたならば、きつとそう思つただろうからだ。

「ハハ…。痛いところを突いてくるね、君は。まあ訳ありでね。…留年してしまつたんだ。」

「留年？お言葉ですが、それはなぜ…？」

廻兎は、この質問は一輝の傷を抉ることになるだろうとわかつていた。わかつてはいたがしかし、この質問をせずにはいられなかつた。それに対し一輝は笑みを浮かべて「…非常に無理をしているように見える笑みを浮かべて…こう答えた。」

「実践の単位が足りなかつただけだよ。まあ…去年色々あつてね。」

「そうでしたか…。不躰な質問、すみませんでした。」

「いや、いいよ。…それにしても早いね。なんでこんなに早く教室に？」

「ちよつと期待し過ぎちゃいました…。それに、早く起きてやることもありませんでしたし。」



折木先生：ユリちゃんが言うには、

- ・勝ち抜いた6名が『七星剣舞祭』出場資格を得る
- ・一人十試合以上は軽くかかる。
- ・不参加も可である。

…らしい。

(…あ、そういえば折木先生って……。)

「じゃあみんな、これから一年、全力全開でがんばろーっ！ーっ！はいみんなと一緒にえいえい・おブフアーッツツ!!? (吐血)」

…ものすごい病弱だったっけ、と一輝と廻兎はそのことを今更思い出した。

その後、一輝が指示した通りにことは進み、折木先生は保健室へ、吐いた血はピーチブロンドの女子たちが処理していた。

新入生たちにウザがられていたと知った時の折木先生は…とても、可哀想だった。

## 第2話

『先生が、今日はもう帰っていいってさ』

と折木の伝言を一輝が伝えたことで、初日のホームルームはお開きとなった。

(えーっと、一輝はこの後珠雫を探しに行くんだっけ？で、日下部加々美さんに…あ。) そう考えたその時には黒鉄の腕に日下部が抱き付き、ステラが悲鳴をあげていた。

(そうそうこうなるんだよ。で、2人の決闘がネットに上げられてるってわかって…) 「なんか気を使わせちゃってごめん。でもクラスメイトなんだから、もつと気軽に声をかけてくれてもいいんだよ？」

「「本当ですか?!」」

途端、クラスメイトの女の子たちが身を乗り出して一輝に迫る。ああ、羨ま…ゲフンゲフンけしからん。剣の稽古なあ…。俺には必要ないんだよね、残念ながら。

(一輝が女遊びしないのはわかってるんだけど、それとこれとは別問題っていうか…。あ、ホント羨ましい。俺、現世<sup>あっち</sup>でもモテたことないもん…。さすがラノベ世界だわ…。)

一輝が散々ミステリアスやら可愛いやら母性本能にクるものがあるやら聴いている



間、ステラを見ると目からハイライトが失われていつている気がした。極め付けは次の瞬間の目下部の一言だ。

「私、実は新聞部を作ろうと思ってるんですけど、先輩に記念すべき破軍高校壁新聞第一号を飾って欲しいんです！見出しは……そうですねー。『驚異の伏兵！噂の超新星を一蹴！』てな感じで。」

「ふうくん。よかつたじゃない。モテモテで。取材、受けてあげたら？先輩。」

うわあ修羅場だ大丈夫かな、とか思うまでもなく一輝は断っているが、それでも目下部は引き下がらず、一輝の腕を自分の胸にあああっ！そういうのもあったな！一輝ホント羨ましい！天然タラシかよ！天然タラシだな！しかしそうは問屋がおろさない。デレかけている一輝にステラが一喝しようとする。

「ちよつとイツキー……！」

「おいセンパイ、俺たちともお話ししましょうや。」

（あ、身の程知らずのモブが来た。）

—————

廻兎は結果を知っていた。そしてその後起こることも知っている。

「知ってるって……つままないな……。」

それに知っていても、何も知らないような言動を取らなければならない。かなり辛

い。

そういうわけで、もう解散していいのだし、と思いつつ寮に帰る。誰か同居人はいるだろうか、それともしばらくは1人なんだろうか、1人はいやだなあ、とか考えながら。神無月廻兎、15歳（転生前と合計32歳）、寂しがり屋。

鍵を開ける。…手応えがない。誰かいるっ!? やった! あ、でも不良だとやだな…。

扉を開ける。自分のものではない靴が置いてある。どんな人だろうか。おそろおそろリビングに行く、人影が見えた。

「あの、すいません。えつと…ルームメイトの方…ですよ?」

「ああ、その通りだ。君こそ、私のルームメイトだな? 優しそうな人間でよかった。…まあ、男性だとは思わなかったが。」

そこには凜とした軍人のような雰囲気、いくつか年上なんじゃないかという女性が微笑んでいる姿があった。

「自分も、ルームメイトが女性だとは思いませんでしたよ。えつと、自分…俺は…私は? とにかく、神無月廻兎と言います。これからよろしくお願いします。」

「俺」で大丈夫だ。タメ口で構わない。私は…この軍人口調をやめられそうにないが、大丈夫だろうか。」

「ああ、いや、大丈夫で…だよ。」

「改めて。私は白金しろがね香久夜かぐや。と言っても、黒鉄家とは何の関係もないし、黒鉄家のように有名なわけでもない。ただ音が似ているだけだ。」

そういう白金の顔には陰りが見える。過去に何かあったのだろうか。

「えつと…風呂かシャワーはもう済んだ？」

「いや、まだだが…それがどうかしたか？」

「ほら、女性に先に入って欲しいし。」

というかそれがマナーだろう。家族でもない人間なのだ、男に先に入って欲しい女はあまり多いとは思えない。

「ああ、そういうことか。気が利かなくてすまない。では先に、シャワーを浴びてくる。」  
「うん。」

さて、ここで問題が発生する。男としての問題である。今、一輝とステラの部屋では風呂場であんなことやこんなことが行われている。それを知っているという事実が、廻兎の思考能力を一瞬麻痺させる。

「…俺もそんな目にあつていいんじゃないか？覗きとか…。」

言いながら頭を振る。これで実行していたら同居人からも友人からも変態扱いされていただろう。いや、最悪の場合…。

「死…か。危なかったな…いろんな意味で。」

数分後、香久夜が出てきたため自身もシャワーを浴び、何も考えないようにして眠った。こうして転生者、神無月廻兔の破軍学園初日は終わった。

(あれ?でも…白金 香久夜なんてキャラ、本編にはいなかったな…。まあいいか。)

—————

一週間後。廻兔自身は見えていないが、ステラと珠雫が戦い、それによる謹慎が解けた今日。珠雫は一輝をデートに誘い、それにステラが介入し、計画が破綻したからとアリヌも付いていく。

廻兔はもちろん誘われないものだと思っていたのだが、一週間、一輝と親しくしていたことが正解だったのだろう。誘われた。

香久夜に話すと「私も連れて行ってくれないだろうか。」と聞かないため、6人の大所帯で映画を見に行くことになった。

…が。

「何着て行こう。俺オシヤレわかんないぞ。」

「軍服でいいだろうか?服選びがよくわからん。」

この部屋にはオシヤレを理解できる者がいないらしい。

◆?◆?

「ごめんごめん、ちよつと遅れちゃった!」

そう言いながら廻兎と香久夜が走って待ち合わせ場所に到着する。どうやら珠雫とアリスはまだ着いていないようだ。

「いいよ、まだ珠雫と有栖院さんが来てないから。ところで、その隣の人が白金さん？」  
「そうだ。私が白金 香久夜。昔から軍人口調で、上からの物言いに聞こえるかもしれないが、大丈夫だろうか。」

（まさかこの質問、自分に関係する人全員に言ってるのかな。）

「僕は大丈夫だけど…。ステラは大丈夫？」

「ええ。いくら皇族とはいええ、本人が自覚してるこもに一々口を出したりはしないわ。」  
「そうか。ありがたい。ではこの口調のままでもいいかせてもらおう。」

ちなみに2人の服装は、廻兎はTシャツと長ジーンズ、香久夜は結局軍服である。廻兎はともかく香久夜は浮くだろう。

…と、そこに珠雫とアリスが現れ、4人（内1人は既知）が散々驚いた後、出発した。行き先はシヨップングモール！楽しく愉快で、大変な1日がスタートした。

—————

まずは映画までの時間を潰すため、アリスの勧めで一階のフードコートに来ていた。「クレープか。実は食べたことがないんだ。これは…そのまま食べられるんだよね？」  
「ええ、さすがに包みは食べられません。」

「んんこのクレープ美味しいっ！」

「でしよう？何せ食べ歩いて調べたからね♪」

女子4人(?)がキャピキャピし始めた。一輝と廻兎は女子特有のこの空気が苦手なため、輪の外から眺めていた。

「先輩は食べないんですか？クレープ。」

「ああ、甘い物はそこまで好きな方じゃなくてね。」

「まあ、俺もクレープ食べるよりコーヒー飲んでる方がいいんですけど。」

と、珠雫の口元にクリームが付いているのを一輝が見つけた。  
(ありやりや、折角の化粧が…)。

「珠雫、ちよっと。」

「はい？なんですかお兄様。」

一輝の方を向いた珠雫の口元のクリームを指でぬぐい、そのまま舐めとった。

「ほっぺたについてたよ。折角奇麗な格好してるんだから、気をつけないと。」

その後は珠雫が赤くなったりステラが口元を真っ白にしたりするのだが…。

「なあ、神無月。」

「どうした？白金。」

「私の口元にもクリーム、ついてないか？」

「ついでるけど…。取って欲しいの？…羨ましかった？」  
「…。」

小さく頷く香久夜。それも顔を赤くしながら。軍人氣質のようできて、意外と初心うぶなのだろうか。

かいとに おおきな ダメージ！

「…はい。取れたよ。（落ち着け俺…！彼女はクレープを食べるのが初めてだと言っていた。この口ぶりからするとクリームが口元に付いたことも初めてなのではないか。この中で彼女が一番親しいのは俺だ！だから俺にこれを頼んだ！それだけだ！勘違いするな、俺！）」

「ありがとう。」

（メチャメチャかわいい。）

こっちはこっちで色々あつたようだ。

◆?◆?

クレープを食べ終え、雑談をしているといつの間にか時間は過ぎ、予定の時刻となつた。

「そろそろ時間ですし、四階に移動しましょう。」

珠雫がそう切り出して、一同フードコートに並べられたテーブルの席を立ち、  
映画館シネマランド

に向かう。

ちなみに珠雫が見ようと思っていた映画は兄妹のラブストーリー（ステラが却下）、ステラが見たいと言ったのはラブロマンスアニメ（珠雫が却下）、アリスが挙げたのは性別の間を取った映画（ステラ・珠雫が却下）だったため、残りは一つだった。

「ワガママねえ。でもそうなるのは残ってるのは一つ。アクション映画だけね。」

「上演作品少ないね。」

「小さな映画館だから仕方ないわ。」

「でもアクションならジャンルのにも男も女も楽しめそうだし、良いんじゃないかな？」

4人はどう?」

「むー。極めて残念ですが、お兄様がそれが良いというのなら…。」

「仕方ないわね。まあアタシはアクションも好きだから別に良いわよ。」

「俺はラブストーリー見るよりはアクションの方がいいな。」

「私も同意だ。というより、アクションの方が好きなんだが。」

「じゃあこれで決定ね。ちように上映開始ももうすぐだから都合がいいわ。」

「アリス。ちなみにそのアクション映画のタイトルはなんて言うんだい?」

『『ガンジー 怒りの解脱』』

「『『なにそれすごい気になる』』』」



というわけで見る映画はアクション映画に決まった。その後一輝とアリスが離脱したが、このあと発生することを考えれば、俺は行かない方がいいだろうと考え、チケットを買って、2人を待つ。

結局、6人は映画を見ることできなかった。

—————

「これが解放軍リベリオンたちか…。そんなにマズくはないけど、ちよつとめんどくさいな…。」  
「神無月はいつらを知っているのか？」

「まあ知らないわけじゃないけど、詳しいわけじゃないよ」

「そうなのか。実は私もなんだ。で、どうする？ 戦うか？」

そう、彼ら2人は…いや、珠雫とステラ含め4人は突如現れた解放軍の人質になっていた。

…と、小学生くらいの少年が解放軍の1人におそいかかった。

「ヤバいな。このままじゃあの親子がうたれる。」

「同意する。このままではいけない。私が出よう。幻想形態ならば大丈夫だろうか？」

「いいと思う。いざとなったら俺も出るから。」

「じゃ、じゃあアタシも…！ どうせ正体はそのうちバレるし！」

「待つて！ ……ここは彼女に任せてみよう。能力も知りたいし。」

そうこうしている間になんの躊躇もなく絞られる引き金。瞬きのうちに襲いかかる鉛弾。

しかし、それが到達することはなかった。親子と銃弾の間に割り込んだ香久夜が、塵一つ残さず消しとばしたからだ。

◆?◆?

「それ以上の狼藉は、この私が許ない。」

解放軍の前に立ちはだかるのは、およそ持ち上げるタイプではないだろうライフルを  
持った、香久夜だった。

「ブレイザー伐刀者だと……ツ！」

「こんのおー！」

彼らはほぼ反射的に、香久夜に向かって一斉に銃弾を放った。

乱れ飛ぶ鉛の飛礫つぶて。だがそれらは……。

「全砲門！フアイアー！」

香久夜の後ろから現れた複数のレーザーに消しとばされる。無論、香久夜の固有デ霊装バイスからも発射されている。幻想形態ならば物ものは壊すが者モは壊さない。レーザーは銃弾を消したあと、解放軍を幾人も気絶させた。

怪我した者はいない。全員無事だ。しかし、人質たちにとっては別だ。

「「きやあああああああああ！」」

突然吹き上がるガンファイアに、人質たちはパニックに陥る。そこで香久夜は。「落ち着け！ここは私がなんとかして見せる。あまりここから動かないでくれ。」

そう、人質たちに声をかけた。その声に安堵した人質たちは落ち着きを取り戻す。

「それから、別にお前たちと戦闘するつもりはない。私の話を聞いてくれないだろうか。」

そう言つて交渉を持ちかける香久夜。

「お前たちが何者なのか。これは聞かない。しかし、私たちに危害を加えるというのなら、戦わざるを得なくなる。あまり荒事にはしたくない。人質を代表し、そちらの頭と交渉させてはくれないだろうか。」

「な、なに言つてんだこの女。テメエに何の権利があるつてんだ！仲間をここまで気絶させやがって！」

「それはお前たちが撃つてきたからだだろう。」

「おやおやおやく？まさか一般人の中に伐刀者がまぎれこんでいたとはあ。」

言い争う両者の間に、顔に入れ墨の入った男が割つて入った。

香久夜がボソリと、誰にも聞こえない声で呟いた。

「お前が…：ビシヨウか。」

## 第3話

「お前が頭かしらか？」

「ええ、そうですよお。名はビシヨウと申します。以後お見知りおきを、お嬢さま。」

「ならば丁度いい。あんなことをしてはいるが、私はあまり戦闘を好まない。まずは対話を考えているが、応じるつもりはあるか？」

「どうやら香久夜はできることなら対話でことをつけたいらしい。その無意味さもわかっているのだろうが。」

「その問答の前に、一つこちらでしたいことがありますね。少し時間をもらっても？」  
「…構わない。」

「そう言つてビシヨウは、香久夜に向けていた目を部下たちに移す。その眼光は香久夜に向けていたほど優しくはない。」

「おい。何をガタガタやってんだ。てめえらあお留守番しゅすばんもまともにできねえのかよお。」  
「ひっ」

「俺ア大人しく待つてろつつつたよなあ？大切な人質には手エ出すなつつつたよなあ俺え？」

「お、俺たちあ止めたんすよ！でもヤキンの奴が言うこと聞かなくて！」  
「ヤアキン……。この騒ぎの原因はテメエか？」

「い、いや、ち、違うんですッ！あ、あのガキが俺のズボンをよごしやがったから……。」  
「アア!?たかがそんなことでガタガター……いや。」

ふと、ビショウは何を思ったのか、思案顔をして黙り込むと、

「……ヒヒヒ。」

「び、ビショウさん？」

「……アア、ヤキン。そりや災難だったなア。同情するぜ俺ア。」

急に先ほどまでと態度を豹変させ、ズボンを汚された部下の両肩を叩きー

「だが安心しろ。てめえら《名誉市民》の名誉は俺たちがまもってやるからな。」

懐から拳銃を取り出すと、その銃口を母親に庇われている子供へ向けた。

「…一応聞いておこう。何をするつもりだ？」

「何って、そりや決まってるよ。このガキに自分のやったことのケジメを付けさせるんですよ。……そりやア大事なことでしよう？人として。」

「やはり…対話をしようとした私が莫迦ばかだったようだ。一つ言っておこう。罪には罰を、確かにいい言葉だ。だがな、それを使っていい相手は犯罪者だけだよ。…

お前たちのような、なあ！」

瞬間、ビショウウの周りから多数のレーザーが放たれる。しかし、それらは全て、ビショウウに掠ることもなく消える。

「……。」

「無言になって…驚きましたか？」

ビショウウがその両手を掲げる。その中指には、禍々しい赤光を放つ指輪がはめられている。それこそが彼の固有霊装《デバイス大法官の指輪》。その特性は罪と罰。左の指輪は彼に對するありとあらゆる危害を『罪』として吸収し、右の指輪でその力を『罰』と言う魔力に変えて打ち返すことができる。つまり、相手が強ければ強いほど強くなるということだ。

しかし。

「いや…知っていたよ。話に聞いていたからな。それで？今吸収したレーザーをどうする？」

「知っていたなら知っていたで構いませんねエ。レーザー？そのままあなたに打ち出すに決まってるでしょうよオ！」

そういつて右手から打ち出される一本のレーザー。多数のレーザーを受け止めたのだ威力は半端なものじゃないだろう。

「残念だ。お前は贖罪の機会を失った。」

その時、香久夜の姿が廻兎の隣に移り、それと同時に珠雫しずくの声が聞こえた。

「《障波水蓮》——ツツ!!」

水使い・黒鉄珠雫が生み出した水の防壁が、人質と解放軍リベリオンを分断した。それが、合図だった。

◆?◆?

はい、俺、すなわち神無月廻兎視点でいこう。あとはわかるよね? 実は上で見ていた一輝先輩が第七秘剣・雷光らいこうでビショウの左腕を斬って返す刀で右手も切断。戦意喪失したビショウが気絶して終わりだ。ちなみに人質の中に混じっていた解放軍は、バレないように俺が才としておいた。そうしてないと面倒だし…。あ、でも彼がカツコよく出てくることはできそうにないね。

◆?◆?

「おいおい、ボクの見せ場がないじゃないか。」

突然どこからでもない、まるで直接頭の中に語りかけるような男の声が響いた。

「(こいつ…直接あた) m 「それ以上言っではいけない気がするぞ、神無月。」 すいません、白金さん…。」

声の主と思われる人物が、目の前の何も無い空間から現れた。手に弓の形をした固有靈装デバイスを携える、一輝たちと年の変わらない、線の細い少年が。

彼の気配は、この場にいる誰もが感じ取れていなかった。Aランクのステラや、ビシヨウたちの襲撃を察していた有栖院でさえも、だ。

それもそのはず、それが彼の能力特性。

そしてそれを一輝は知っている何しろ彼は、一輝の元クラスメイトなのだから。

「ひさしぶりだね、桐原君。」

彼の名前は桐原静矢。前年度の『主席入学者』にしてー去年の七星剣武祭代表の一人だ。後にジャンケンがどうか言われるようになる例の彼である。

ガールフレンドは多いしイラつく言動するしで原作でもアニメでもいい思い出ないんだよね…。

「ああ。ひさしぶりだね、黒鉄一輝君。」

かつての級友との再会に桐原は静かに微笑み、

「君、まだ学校にいたんだ。」

細めたまぶたの隙間から、嘲りの視線を寄越した。

…俺こいつ嫌い！原作でもアニメでも！ましてや三次元になるとそのウザさは1.5倍くらいに跳ね上がる。しかもこの辺俺とか原作にいない白金さんとか関係ないし。

よって割愛！

◆? ◆?



デパートから帰った廻兎たちは、それぞれの部屋に戻った。

「ほんつとに嫌な奴だな、あいつ<sup>脚原</sup>。一輝の試合の日が楽しみだ、まったく…。さつさと負けて生き恥晒せばいいのに。」

部屋で一人ごちる廻兎。香久夜はシャワーを浴びている。

「まあそれはともかく…。白金さんにはあとから聞かないといけないことがあるな。」

噂をすれば影がさす、と言うが、丁度香久夜が出てきたところだった。

「いつもいつも先に済まないな。風呂場、空いたぞ。」

「ああ、ありがとう。…とところで質問なんだけどき、転生って知ってる?」

「てて転生?こ、言葉としては知っているが、そそそ、それはどう言う意図の質問だ?」

目が泳ぎ、口元が引きつっている。動揺が激しすぎるだろ!だらうなとは思ってたけど隠す努力ぐらいいしようよ!

「誰にも言っていないんだけどき、俺、別の世界から転生してきたんだ。」

「ほ、ほー、そうなのかい。それは驚きだなー!」

「完全に棒読みだよ。昼の戦闘中でも、解放軍とかビショウとか知ってたし、出てない言葉を取って、向こうの世界のネットによく見たスラングを遮ったりしてたし。

…君も転生したんじゃないのかい?」

「うう…:はい、そうです。あ、で、でも、このことは誰にも言わないでね?」

もう口調が崩れている。軍人口調はキャラ作りだったらしい。しかしそんなところも可愛い。

「誰にも言わないよ。ていうか、俺もそうな以上誰にも言えないし。」

「ありがとう、神無月君……。」

しかし、転生者である以上、向こうの世界で死んでいるということだ。彼女にも何かトラウマがあるかもしれない。が、それは今聞くようなことではないだろう。

「この話題はここままで……じゃあ、俺は風呂に入ってくるよ。今の口調もギャップがあつていいと思うけど、俺はやっぱ軍人口調の方が好きだな。」

「そ、そう？……じゃあ、そのままにしておくよ。……いや、そのままにしておこう。」

というわけで答え合わせ終わり……その後……特に何もイベントはなく風呂に入つて寝ましたよ。ええ、何もなかったですとも。……何も……なんでないんだろうなあ……。

## 第4話

解放軍の事件から一夜が明けた月曜日。

破軍学園ではついに六つの『七星剣武祭出場枠』を巡る『選抜戦』が始まった。

『さあ始まりました！選抜戦初日の注目カード！またもや黒鉄珠雫選手に続くBランク！とは言いますが限りなくAランクに近い彼は、いったいどんな戦いを見せてくれるのかあ！神無月廻兎選手の第一戦ですッ！』

ちなみに彼は新入生ナンバー3。珠雫に少し劣っている程度。観客席はそんな彼の偵察に来た生徒たちで溢れていた。

『相手をするのは二年生、入学以降その能力と共に学園に名前を響かせてきたCランク騎士・雑賀石山選手！去年は七星剣武祭代表に選ばれませんでした！が今年はどうか！今、試合開始のブザーがー鳴りましたあ！』

「ごめんね、でも今年こそは出場したいんだ。だから僕は君を倒し、先に進む。」

そう言って石山は自らの固有霊装である杖を取り出す。

「僕の能力は石化！足を止めたところを一撃で仕留める！」

『序盤から出たああ！石山選手の伐刀絶技、《石魔物》だあ！廻兎選手の足が固まる！こ

のまま負けてしまうのかあ!」

「確かに動けないですけど、この能力ならもつと上まで石化させた方が良かったですね。  
…第1回転、旋風!」サイクロン

廻兎の周囲から風が吹き始める。俗に言う旋風だ。風力としてはあまり強くはない。「それが君の伐刀絶技かい? Bランクだというのに、あまり強い能力じゃないんだね。それならやはりこちらのものだよ!」

「何言ってるんですか、まだまだ行きますよ! 第2回転、台風!」タイフーンそして…第3・回・転  
! 竜巻オ!」トルネード

最初は旋風であつたそれは、さらなる強風を経て、天井を突き破らんばかりの勢力を誇る竜巻へと進化した。

『おおつとお! 石山選手の足が、まるで自分の能力をかけられたように停止したあ! まさかこんな能力を有していたとは、噂にたがわぬBランク! 会場も騒然としています! 解説の折木先生、彼の能力とはどのようなものなのでしょう!』

『んー。私もよく知ってるわけじゃないんだけどね? 入学試験の時からよく竜巻起こしたー、とか、攻撃が弾かれるー、とかっていう噂を聞いてるわ。でも本人は別に風のパワーじゃないって否定しているし…。真相はまだ謎のままなのよ。』

『ありがとうございませす! そして吐血しませんでしたね! 調子いいですね、先生!』

『私としてはお薬打てないから残念なんだけどね…。』

ちなみに一つ前の珠雫選では三回目の吐血をし、注射を打っていた。…あの先生は  
 いったいどうやって生きているのだろう、といつも廻兎は思っている。

「そのまま薙ぎ払う！風の竜よ！呑み込め！《<sup>フアズニール</sup>二頭竜》！」

石山の体は竜巻に巻き込まれ、飛んで行き、そのまま地面に落ちた。そして――  
 「雑賀石山、戦闘不能ッ！勝者、神無月廻兎！」

気絶した。

『試合終了ー！ーッ！勝ったのは1年、神無月廻兎選手！石化能力を歯牙にも掛けず、  
 初戦を白星で飾りましたあ!!』

「よし、とりあえず一戦は突破した、っと。」

そうして微笑みながら訓練場を後にした。

(そういえば、あつちはどうなったかな。)

◆?◆?

ステラの試合が終わった後の、第七訓練場。

そこにはステラの時のような騒がしきはなく、静寂が訪れていた。

当然と言えば当然。

ステラはそのくらい人が集まる人気者だが、ここに立っているのはそんな人気者では

ない。

「ここまで人が減るのか……。人に見られるのは苦手だが、ここまで人がいないとなると……それはそれで悲しいな。」

そこに立つのは廻兎のルームメイト、白金香久夜だった。

『新入生主席の戦いが終わり、観客は少なくなりましたが！まもなく次の試合が始まるうとしています！そこにいるのは新入生、白金香久夜選手！まだ誰とも戦ったことがないという彼女ですが、いつたいどんな戦いを見せてくれるのかあ！それに対するは3年生、《鉄の処女》こと鳩里絵留選手！さあ今日も出るか!?多数の相手から血を搾り取ってきた必殺技、スパイクがあ！』

「先に謝っておきますね。私の能力は、相手に傷をつけることを最も得意とします。ですからズタズタになるかもしれません。泣かないでくださいねえ。」

邪悪な笑みをこぼす妖艶な美女、鳩里に対し、香久夜も謝る。

「こちらこそすまないな。例え相手が目上の人でも、この口調は直せないんだ。そこだけ了承してほしい。それから……そちらこそ、泣くなよ。」

『両者共に固有霊装を構える！鳩里選手は禍々しき杖を！白金選手は猛々ただけしきライフルを！そして！今！試合開始のブザーが鳴りましたあ！ーっ！とオ!?ブザーが鳴った瞬間、白金選手の姿が消えたあ！彼女はどこに行ったのか!?』

「後ろだよ。武器を捨てて手を上げる。さもなくて…撃つぞ？」

言いながら鳩里の頭に照準を当て引き金を引く。射出されるのは当たり前のごとくレーザー。

「ああ、それから…私の銃は少しばかり強力すぎるんだ。幻想形態だが、勘弁してほしい。」

『そのライフルから撃ち出されるは弾ではなくレーザー！しかし直前に幻想形態に変えたようです！人を傷つけたくないのでしょうか？何はともあれ試合終了オ！経験差をもともせず、わずか数秒で勝利を収めましたあ！』

彼女は知っている。いかにIPS再生槽カプセルが優秀とはいえど、失ったものは戻ってこないことを。そして、自分のレーザーは一切を消滅させるものであることを。

（よし、1回戦は突破した。神無月は勝つただろうか？）

そう思いながらリングを後にする。その途中、

『えーたった今、第十五訓練場で試合を行っていた新入生、神無月廻兎選手も、二年・雑賀石山選手を相手に勝利を収めたと連絡がありました！』

廻兎の勝利を知った。

それを聞き小さくガッツポーズをしたのは、自分だけの秘密だ。

◆？◆？

「お疲れ様、白金さん。」

寮室に入った香久夜がまず最初に聞いたのは、廻兎からの労いだった。

「神無月こそ、お疲れ。」

「とりあえず一回戦が終わったね。これからも、がんばろう。」

「ああ、七星剣武祭には出場してみたいからな。ステラや黒鉄とは当たりたくないものだ。」

「明日は一輝さんの初戦があるけど……見に行く？多分不快な思いを思うけど。」

その戦いは《狩人》、桐原静也きりはらしずやとの戦いである。観客席がどうなるか、リングでどうなるか、2人は知っている。

「行くさ。友の初舞台だろう？」

「白金さんならそう言ってくれると思ったよ。明日は精一杯応援しよう。」

「俺（私）たちの友のために。」



## 第5話

翌日、場所は第四訓練場、時間は十三時半。

そう、第四試合、黒鉄一輝と桐原静矢の試合である。

廻兎かいとと香久夜かぐやの両者はこの試合の結末を知っている。知っているが、自分たちが関わったことで何かが変わってやしないかと心配していた。

（いや、大丈夫なはず。確かに一輝とは関わってきたけど、戦闘面に関することは特に何もしていない。）

訓練場に二人が向かい合うように入ってくる。

方や優勝候補の一角、方やFランクの落第騎士ワーストワン。彼らは一言二言言葉を交わし、先頭の火蓋は切つて落とされた。

突然消える桐原、後何故か生えてくる木。

廻兎は隣に座る香久夜に小声で話しかける。

「香久夜、あれなんで木生えるんだろうな」

「さあ………そういうえげよくわからん」

「しかしやっぱ対人戦において消えた上で存在感を消すって厄介だよなあ。俺は広範

困持ってるから問題ねえが」

「私も問題はない。しかし見る限り……一輝が苦戦するのはよくわかる」

矢を撃たれる一輝。それを意に介さず刀で打ち落とす。本体が見えなくとも矢が見えれば対処できる。そういう考えだ。

しかし。

「ぐ、あああー！」

突然の苦鳴。見ると、一輝の太ももには穴が開いており、そこには不自然に止まる血の飛沫があつた。

「見えない矢、か。緊張してんだな」

「ステラも気付いたようだ。私たちが転生者だとバレないよう、もう少し声のボリュームを落とすでしょう」

「ああ」

そこから先は一方的だった。一方的な『狩獵』。実況の月夜見の声が詰まるほどに。

致命傷となる場所には矢を打ち込まず、手や足といった部分にのみ矢を打つていく。側から見れば打つ手なし、勝ち目なしの負け戦だ。

「一輝は、こんな戦いをしたんだな」

「正直見ていられないな。私がヤツと当たれば腕の一つや二つ、吹き飛ばしたという

のに」

廻兎の顔に皺が寄る。彼に押し寄せる感情はただ一つ、怒りだけだった。そしてそれは、香久夜もまた同じ。

自分たちの隣にいるステラたち3人を見ると、似たような顔をしていることに気づく。

しかし、二人には絶対的な自信があった。一輝は勝つと。それは未来を知っているから、というチープな理由ではない。そこにあるのは信頼だ。

そしてついに桐原が仕掛けた。内臓が詰まった胴体を、撃ち抜き始めた。と同時に煽り始める。

やがて聞こえ始めるのは観客たちの嘲笑の声。

「あく、クソみてえだな。死なねえかなこいつら」

「こらこら、そういうことは言うものじゃないぞ?」

「だって今こうやって嘲笑ってるこいつら、一輝が選抜戦勝ち抜く頃には手のひら返してんだぜ?」

「それは……そう考えると一度死んだ方がいいのではないか?」

「さすがに冗談だがな」

冗談に聞こえない冗談を言う廻兎。事実、今訓練場を支配しているのは一輝を馬鹿に

する声だ。

「Fランクが七星剣王になどなれるわけがない。ステラとの試合はヤラセだった。クズだ。ペテン野郎。そういつた罵声で埋め尽くされている。少数は一輝を応援する輩もいるにはいるが、数が少なすぎる。」

「ま、ここで声を上げるのは俺たちじゃねえよ」

「そんなこと知っているさ。……そろそろだろう?」

一輝の心が弱い方へ傾きかけた、その時だった。

「だまれええええええええええええええええええええええ!!?!?!?!」

あかりに緋色の瞳を燃やし、火炎の燐光を散らす《紅蓮の皇女》、ステラ・ヴァーミリオンの心からの叫び声。

「そうそう、一輝の目を覚ますのはこれじゃないと」

「笑っているぞ? 廻兎」

「ん? そうか? いやー、生で聞いたら今までの苛々全部吹っ飛んでなあ」

ステラの叫びはまだまだ続く。

「FランクがAランクに勝てるわけがない? そんなの、アンタ達が勝手に決めつけた格付けじゃないのツ! アタシ達天才には何をやっても勝てない。そうやって勝手に枠にはめて、自分自身の諦めを正当化しているだけ! そうやってお前達が諦めるのは勝手に

よ。だけどお前達の諦めを理由にイツキの強さを否定するなアツ!!?」  
廻兎達二人はそれを聞いて晴れやかな気分になった。

二人は知っている。ステラが、一輝が自分よりも強いことを知っていることを。それ故に、それをバカにする奴らを許せないことを。天才が、才能が、努力に勝てないこともあることを。

「知ってるってのもいいもんだなあ。それなりに安心できる」

「いいシーンだ、喋るものじゃないぞ」

「才能なんてその人間のほんの一部でしかない。そんな小さなモノにしがみついているアンタ達に、イツキの強さがわかるわけがないツ！理解できるわけがない！だからそんな知った風な口で、——私の大好きな騎士をバカにするなアツツ!!?」

顔を上げ、ステラの方を向く一輝。その顔は今にも崩れ落ちそうな弱々しいものだった。

「イツキ言つたじゃないの……ツ。他人に何を言われても、自分を諦めないって……！アタシ、そんなイツキとなら、どこまでも上を目指していけるって思つたのよ！だからこんな奴らに好き勝手言われたくらいで、そんな、諦めたような顔するんじゃないわよツ！アタシはそんな弱い男に負けたつもりはないわ!!?アタシが、……つ、アタシが憧れたのは、……アタシが好きになったのは、いつだって上を向いて、自分自身を誇り

続ける黒鉄一輝という騎士なんだから!!?ーだからッツ

アタシの前ではずっと格好いいアンタのままでないさいよこのバカアアアアッ!!  
?!!?!!?

直後、一輝が自分の拳でじぶんのがんめんを、音が響くほど強く殴りつけた。

「ありがとう。ステラ。……いい活が入った。」

そして立ち上がる。ゆつくりと、しかし力強く。

「流石に喋れねえよ、今は」

「そうだな。最高のシーンだ」

一輝は叫びながら魔力をかき集める。《一刀修羅》のために。

そして……。

「僕の最弱さいじきょうを以て、君の最強を捕まえる。ー勝負だ。桐原君!」

「ここで決め台詞! 一輝くんカッコいい! 最高!」

「ハア、わかったから落ち着け。廻兎」

香久夜は赤くなっている。例のアレのせいである。

一応落ち着いた廻兎は真剣な眼差しで一輝を見る。丁度心臓に放たれた矢を掴んだところだった。そう、《完全掌握パーフェクトグレイジョン》の発動である。

そこから先はまるでお返しのように一方的だった。百を超える不可視の矢を放つ



S カプセル再生槽に入れられた。桐原はリングから引きずり出された。ついでに応援の女子に愛想尽かされた。

「ざまあwwww」

「廻兎……」

「何はともあれ勝ってよかった。さ、ステラも病室行ったし、俺らも部屋戻るか」

「そうするとしよう。アリス、珠雫、私たちは先に行くぞ」

「わかったわ、気をつけて。あたしは珠雫と美味しいもの食べに行くから」

「香久夜も今度行こう？」

「ああ、また今度な」

廻兎はなんとなく気まずい想いをしていたが、二人はこうして帰路についた。